

### 一般演題3-1

## 岐阜大学医学部附属病院 高度救命救急センターにおけるHBO (1種)の使用状況 ～第2報2012年～

豊田 泉 山田法顕 土井智章 中野志保  
中野通代 加藤久晶 白井邦博 三宅喬人  
田中義人 小倉真治

岐阜大学医学部附属病院 高度救命救急センター

岐阜大学医学部附属病院は、2004年6月の病院移転以来、高度救命救急センターでの管理下にてHBO治療を行っている。2008年第43回の日本高気圧環境・潜水医学会学術総会において、その使用状況を第1報としての報告を行っているが、その時点では、計551回、64症例に使用。内訳は口腔外科領域での術後感染症やイレウスが多いこと、HBO施行に当たっての人手不足の問題などが述べられた。

今回は、その後の4年間を含めた2012年4月までの計約8年間の使用状況について報告を行った。合計施行数は、おおきく増加して、1688回、175症例となった。使用の診療科領域は口腔外科、耳鼻咽喉科、整形外科領域の術後感染、重症外傷に対する創傷治癒と感染予防、化膿性脊椎炎・壊死性筋膜炎・頸部膿瘍などの感染症領域に対しての施行が全体の75%以上を占めた。イレウス、急性CO中毒、間歇型CO中毒に対しての使用数は、大きな変化はなかった。また、当院では脳梗塞、脳出血術後などの脳卒中には、ほとんど使用されていない。

救命救急の患者として求められる、バイタル・サインが極めて不安定な患者への使用については、1種装置では限界があり、施行には至っていない。

また、高気圧酸素治療専門医も1名から3名に増え、2.3年内には、数名に増える見込みである。

さらに、保険診療上の急性期施行は前回と同様に全体の数パーセント程度である。院内での認知度がアップするにつれ、当初は口腔外科から依頼が多かったが、現在では耳鼻科、整形外科領域からの依頼が増加した。

装置の稼動とメンテナンスなどを考慮すれば、まだまだ、病院の収益に対する貢献は高いとは言い難い

が、臨床的有用性は極めて大きいと思われる。なお、2011年度より、臨床工学技士のサポートが可能となり、原則、平日では2症例のみ管理可能となり、徐々に現場救急医への負担は軽減されつつある。